

唱歌誕生!!

雅楽と讃美歌が出会い、日本の唱歌ができるまで

加藤良一 2025年1月9日

子どもの頃から親しんできた唱歌とはいったい何なんだろう、学校教育の場でどのような位置づけにあったのだろう、さらにはどのようにして生まれた音楽なのか、と関心を寄せていたところ、「近代日本音楽史塾」がまさに「唱歌誕生」というテーマでセミナーを開くというので興味を持って聴講した。

→ クリックすると大きな画像がご覧になります

令和6年度青森中央学院大学学芸部学芸員奨励事業

近代日本音楽史塾

唱歌誕生!!

雅楽と讃美歌が出会い、日本の「唱歌」ができるまで
最新研究が迫る! 私たちの音楽的感性はどのように形成されたのか!?

●日時: 2024年12月1日(日) 13時
(受付開始: 12時30分)

●会場: 東京音楽大学 中目黒・代官山キャンパス C401 大教室
東京目黒区上目黒1-9-1 東急東横線「中目黒駅」代官山駅より徒歩5分

●主催: 青森中央学院大学 【共催】安田寛治音楽塾

プレゼンテーション

基調講演「洋楽史再考」——北原かな子(青森中央学院大学教授)
保育唱歌と日本語のリズム——安田 寛(奈良教育大学名誉教授、安田寛治音楽塾長)
保育唱歌とその意義——ヘルマン・ゴチェフスキ(東京大学教授)
「心のふるさと」を作った作曲家たち——北原かな子(青森中央学院大学教授)

参加費 無料 お申込み 事前のお申し込みは不要です

セミナーの開催にあたって

1868年の明治維新以降、日本では西洋の音楽が特に優美な
や聖歌の中で唱えられ、民衆の日常の音楽的な要素が
新しい生活の要素に置き換わった。後に集約されている
。しかし、実際の生活はそれとは異なり、音楽に
録された。この新曲が生まれていく中で人々の生活の

一つは、保育唱歌の歴史とその歴史がブラックボックス
になっていることです。優美な、聖歌、小唄歌(聖)に比較
すると、保育唱歌は正にこの時期です。保育唱歌を知るこ
で、日本の近代音楽史はまったく新しく見えてきます。青森
と一線にその歴史の脈をたどりたいと思います。

お問い合わせ 青森中央学院大学 研究支援・地域連携課 Tel: 017-728-0131 Mail: kenkyushien@aomorigu.ac.jp

青森中央学院大学

近代日本音楽史塾セミナー

唱歌誕生!! 雅楽と讃美歌が出会い、
日本の「唱歌」ができるまで

2024年12月1日

東京音楽大学

中目黒・代官山キャンパス

基調講演: 洋楽史再考

北原かな子(青森中央学院大学教授)

報告1: 保育唱歌と日本語のリズム

安田 寛(奈良教育大学名誉教授)

報告2: 保育唱歌とその意義

ヘルマン・ゴチェフスキ(東京大学教授)

報告3: 「心のふるさと」を作った作曲家たち

北原かな子



セミナーには全国から100名ほどの聴講者が、真新しい中目黒・代官山の東京音楽大学キャンパスに集まった。

基調講演: 洋楽史再考 北原かな子

北原教授から、最初に理解しておきたいこととして、明治期に文部省から刊行された初等教育用音楽教科書は、以下の二つであることが示された。

1. 1882年から刊行の『小学唱歌集』(初編～三編)のとくに初編はほぼ**すべて讃美歌**だった。
2. 1910年から刊行の『尋常小学読本』、『尋常小学唱歌』は**全曲日本人の作詞作曲**であり、それも編纂委員の合作であった。

1882年から1910年の30年間で初等教育用音楽教科書は、上のように大きな変化が起きていた。とくに1893年に出版された、『祝日大祭日儀式唱歌』は初の全曲日本人の手になるもので、さらに、8曲中7曲までがいわゆる職業音楽家である雅楽寮^{がくりょう}伶人^{れいじん}※の作曲だった。まさにこの時期こそが唱歌のターニングポイントだったと北原教授は強調していた。



北原かな子教授

※ 雅楽寮伶人： 雅楽寮とは、大宝律令(701年)により、朝廷の音楽を司り、日本固有の歌舞と大陸の国々から伝来した外来歌舞の演奏を担当する役所として設置された。様々な公的行事で雅楽を演奏すること、また演奏者を養成することが職務。伶人は、雅楽寮で雅楽を演奏する楽人を指す。

明治期に西洋音楽の受け皿となったのは、伝統音楽の担い手だった伶人たちだった。彼らは讃美歌に丸ごと^{せっけん}席卷されるのを防ぐため、肉を切らせて骨を断つ智慧を働かせたのである。すなわち、旋律は讃美歌を採用し、歌詞は日本のものを使ったのである。

報告1: 保育唱歌と日本語のリズム 安田 寛



安田 寛教授

「保育唱歌※の文明史～縄文時代から今日まで～」と題する講演であったが、とくに「音律-五七調と七五調への伶人たちの貢献」については、正直なところ門外漢にとってはかなり難解な内容だった。

※ 保育唱歌：明治10～13年にかけて創作された幼児教育のための唱歌。正式名称「保育並ニ遊戯唱歌」。作ったのは、宮内省式部寮雅楽課の伶人(楽人)たち。保育唱歌の中には「君が代」が含まれていることでも有名。

海外からキリスト教とともに押し寄せて来た讃美歌に対抗したのは、宮廷音楽家の伶人たちであるというは、前述の北原教授と同じ解説だった。しかし、讃美歌の導入に際し、ひとつの未解決の問題が詩人たちの前に立ちだかったという。詩人たちは日本に古くから伝わる「五音七音」、「五七五七七」の詩を残したいと願うが、そもそもその「五音七音」とは何なのかと問われたときに答に窮したのである。その後、歌人・土屋文明がけっきょく「五七五七七」は明らかにすべき性質のものではなく、「ア・プリオリ」※にそこにあるものだとした。そこで、伶人たちは、「ア・プリオリ」にそこにあることばを使って保育唱歌をつくったという。

※ ア・プリオリ (a priori) とは、「より先のものから」を意味するラテン語。中世スコラ学においては「原因・原理から始める演繹的な（推論・議論・認識方法）」という意味で用いられていたが、カント以降は「経験に先立つ先天的・生得的・先験的な（人間の認識条件・認識構造）」という意味で用いられるようになった。

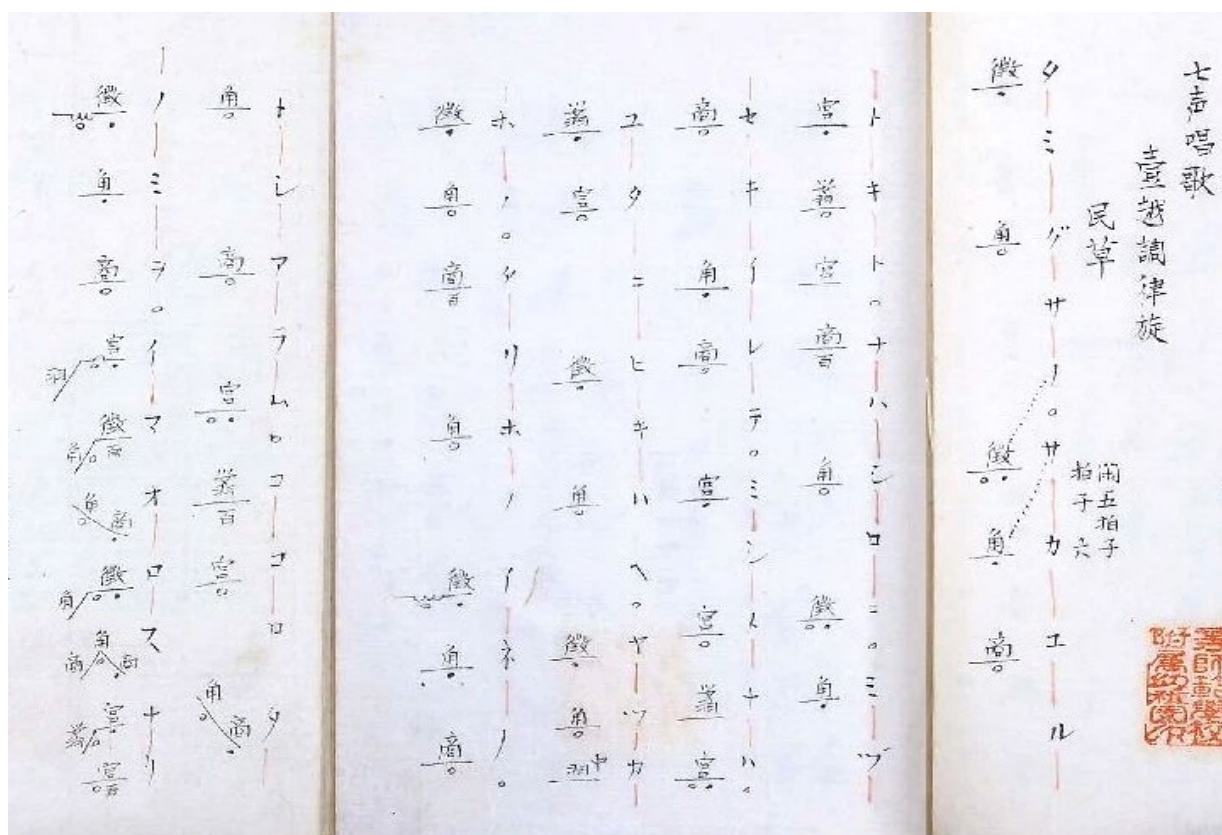
報告2: 保育唱歌とその意義 ヘルマン・ゴチェフスキ

ゴチェフスキ教授は、保育唱歌の特徴がよく表れた代表的な例として「民草」を取り上げ、どのようにして西洋音楽に日本の五七調の古い言葉を組み込んでいったかを解説された。

「民草」は唱歌の中ではめずらしく遊戯にも使われる曲だが、唱歌として歌うときは和琴が伴奏をつけ、歌詞1文字に1音をあてるシラビック形式で歌われた。



ヘルマン・ゴチェフスキ教授



保育唱歌「民草」一段 清水たづ写本(明治16年) お茶の水女子大学所蔵

ゴチェフスキ教授は、保育唱歌と西洋音楽を下の表のように対比して整理している。

保育唱歌	対	洋風唱歌
墨譜（ハカセ、歌詞が中心の楽譜）		五線譜、数字譜等（音符が中心の楽譜）
伴奏は和琴、笏拍子、その他雅楽器		伴奏はオルガン、ピアノ、その他洋楽器
歌詞は短歌または長歌（訳詞または古歌）		歌詞は七五調または自由形（訳詞または新作）
通作歌曲または複雑な有段形式		単純な有節形式
音階は大多数「律旋」、「呂旋」もある		音階は大多数「長調」、「短調」もある
拍子は早四拍子、閑四拍子、閑五拍子等		拍子は 2/4, 4/4, 3/4, 6/8 等
単旋律、最初の句はソロ、その後斉唱		単旋律で斉唱（2声、3声の場合もあり）
音価、リズムの種類が少ない		音価、リズムの種類が多い
シラビックまたはメリスマチック（装飾付）		主にシラビック、装飾音なし

ヘルマン・ゴチェフスキ教授の講演レジュメより

ゴチェフスキ教授はドイツ人ながら、驚くほど日本の古い文化や音楽に詳しい研究者である。フライブルグ音楽大学のピアノ科を経て音楽学の博士号を取得し、2004年から東京大学大学院の教授となっている。

2015年、『仰げば尊し——幻の原曲発見と『小学唱歌集』全軌跡』（桜井雅人・ヘルマン＝ゴチェフスキ・安田寛共著）出版し、「仰げば尊し」を含む『小学唱歌集』収録曲の全容を解き明かしている。

報告3:「心のふるさと」を作った作曲家たち 北原かな子

北原教授は、保育唱歌の問題を考えるにあたっては広く日本全体を視野に入れないといけない、と青森という東北の片田舎で育ったものとして強調したいという。あらゆる研究はややもすると東京一極集中、つまり東京音楽学校、今の東京藝大を中心に行われていたと思われるのは困る、というのである。

幕末から明治にかけての激動の時代、とくに弘前藩の武士たちは、戊辰戦争に敗れ（戦争終結前に奥羽越列藩同盟から脱退していたので、負けたわけではないが勝ったともいえない微妙な立ち位置となった）、その後、身分制度の廃止とともに居場所がなくなってしまった。そんな状況のなかでキリスト教宣教師に出会い、図らずも歌を歌うことになったが、武士たちにとってこれは大変な困難をとまなうものだった。それまで慣れ親しんだ日本の音楽とあまりにもかけ離れていたからである。

当時の日本人は「ドレミファソラシ」を「ヒフミヨイムナ」と読んでいたが、とくに第四音「ヨ」（ファ）と第七音「ナ」（シ）を正確に歌えなかった。そこで、その二つの音を抜いた「ヨナ抜き音階（四七抜き音階）」が明治以降の日本で使われた五音音階である。また、音・音楽だけでなく、言葉の発音も大きな課題であったという。それまでは同じ藩のうちに会話が通じればすんでいたが、近代化とともに共通の言葉にしなければならなくなったのである。



話を戻すと、青森の武士たちはキリスト教徒と出会ったことで、いやおうなく讃美歌に親しみ、次第に英語力を付けることになった。それにより直接アメリカへ渡り、帰国後は東京で官吏となる道を開いた。このように明治初期に讃美歌を歌った武士たちがいたことを忘れてはいけない。

今回のセミナーで強く感じたことは、唱歌を語るには、まず賛美歌との関係が極めて重要だということだった。讃美歌の世界展開は、キリスト教が進出していったそれぞれの国の伝統音楽を、ある時は吸収・融合し、ある時は凌駕するかたちで拡大していった。

日本においては、西洋の旋律を受け入れながらも、歌詞は古くからのことばを残してきたという極めてめずらしい歴史がある。唱歌の歴史を知ることができた素晴らしい講演だった。三人の演者の報告に続く質疑応答の際には、会場から多数の質問が寄せられ、聴講者も参加する形で、熱いが和やかな雰囲気うちに終了した。

セミナーの様子は、青森中央学院大学ホームページにアップされている。(↓) かなり長い！



- 基調講演「洋楽史再再考」
北原 かな子
- 報告1「保育唱歌と日本語のリズム」
安田 寛
- 報告2「保育唱歌とその意義」
ヘルマン・ゴチェフスキ
- 報告3「「心のふるさと」を作った作曲家たち」
北原 かな子
- 質疑応答

【関連資料】



唱歌と童謡どちらがうのか？ 加藤良一（2024年5月31日）

Back

音楽・合唱コーナーTOPへ

Home

Topページへ戻る